

社会主義の世俗化と第一次世界大戦

「クローズ 社会主義」前史

尾上 正人

はじめに

- 1 「小さな同人会」 独立労働党の危機
 - 2 19世紀における宗教生活の意外な持続と発展
 - 3 非国教派と自由労働主義
 - 4 キリスト教社会主義，そして独立労働党
 - 5 社会全般の世俗化と労働党内の宗教的多元主義
 - 6 大戦終結，そして「クローズ 社会主義」へ
- おわりに

はじめに

かつて拙稿で取り上げたように⁽¹⁾，トニー・ブレアによる英国労働党の伝統的教条「クローズ社会主義」(党規約の国有化条項)の廃棄は，他面では，彼自身も深く帰依しているキリスト教社会主義の復権という意味を持っていた。現在までのところ実際に復興著しいかどうかは別にして，復興が喧伝されるということは当然ながら，それ以前にキリスト教の影響力の強い労働運動(ひいては社会主義)というものがあって⁽²⁾，さらにこれがある時期から衰退したという認識前提がある。本稿が扱うのはまさに，この部分の話なのである。

あらかじめ要点を掻い摘んで言えば，英国労働党は特にその思想的中心母体の一つである独立労働党などから，主として非国教派キリスト教の社会改革思想を引き継いでいた。ところが，第一次世界大戦に際して，独立労働党がその宗教的倫理観から微温的ではあるが反戦の姿勢を取ったために国民大衆のナショナリズム感情に齟齬し，労働党内における威信・地位が低落した。その間隙を衝くかのように労働党の指導的地位に上り詰めたのがフェビアン協会のシドニー・ウェッブであ

(1) 尾上正人『『クローズ 社会主義』の顛末 トニー・ブレアが否定したもの』、『大原社会問題研究所雑誌』No.470，1998年，1-13頁。

(2) あえて「キリスト教社会主義」とせず「キリスト教の影響力の強い」としたのは，19世紀の場合，後でも述べるように前者は，かなり限定され固有名詞化された運動を指すことになるからである。本稿の対象とする社会主義・労働運動は，これよりも広い含意である。

り、彼の手によって「クローズ」を中核とする新規約が作られて労働党の世界認識が刷新されたのである。すなわち、産業国有化条項は、19世紀末から始まっていた宗教的世界観の後退＝「世俗化」を、社会主義思想の分野で体現するものだったのである。

1 「小さな同人会」 独立労働党の危機

第一次大戦中の1915年という年は、独立労働党の創設者でありかつ英国労働党の精神的支柱でもあったケア・ハーディが死去した年であった。そして、この巨星墜落の陰で、シドニー・ウェッブが党の中央執行委員会に初めて名を連ねたのも、1915年であった。と同時に、この年は、1900年の労働代表委員会結成以来一貫して労働党内で指導的立場を占めてきた独立労働党（Independent Labour Party）の、いわば支配の「正当性」が大きく揺るがされた年でもあった。その経緯をとりあえず掻い摘んで言えば、独立労働党指導層の多くが掲げた一種微温的な反戦主義と、労働党党员の大宗を占める労働組合員たちの好戦気分とが対立し、前者が孤立を強いられていったことにある。同じく独立労働党员であったJ・ラムジー・マクドナルドが開戦前の12年に労働党執行委員会議長、次いで14年に労働党党首（議会労働党議長）の職を辞したのにも、妻の急逝が直接の原因とは言えこの政治的孤立が影響していたことは疑いない⁽³⁾。

とは言え、独立労働党の第一次大戦への反戦主義は上で述べたように微温的なものであって、ドイツなど欧州大陸諸国の反戦主義のように、社会主義政党に深刻な内部分裂を持ち来すような性質のものではなかった。もともと伝統的に、英国の左翼で愛国主義を完全拒否した国際主義・平和主義の立場を取るものはごく少数であり、その平和主義というのも、戦争の未然防止に全力を尽くすが戦争・武力衝突を絶対悪と見なすわけでもなく、他国の攻撃を受けたら祖国防衛に全力を傾注すべきであるといったものでしかなかった⁽⁴⁾。ポーア戦争に際しては一致団結して反対の立場に立った独立労働党も、第一次大戦に関しては共同行動を取り得ず、労働運動とも繋がる下部組織では好

(3) 大戦直後の1918年の総選挙では、愛国的雰囲気が残る中で、マクドナルド、スノーデン、ジョウエットといった独立労働党の面々はそろって落選している。ただし、大戦後しばらくすると反戦の旗手として、マクドナルド、スノーデン、ランズベリーらの道徳的権威は戦中の不人気を補って余りあるほどに回復することになる。マクドナルドは「生ける殉教者」「嘘つきだらけ（a world of liars）の中の唯一の誠実な男」として祭り上げられ、そのカリスマ的人気が以後3度の首相就任に結びつくのである。Jon Lawrence, 'Labour the myths it has lived by,' in Duncan Tanner, Pat Thane and Nick Tiratsoo (eds.), *Labour's First Century*, Cambridge University Press, 2000, p.346. 1920年代にはマクドナルド人気は絶頂に達し、党内の深刻な対立を糊塗する効果すら発揮した。Tim Bale, 'Crimes and Misdemeanours: Managing Dissent in the Twentieth and Twenty-First Century Labour Party,' in Brian Brivati and Richard Heffernan (eds.), *The Labour Party: A Centenary History*, Macmillan, 2000, p.270. しかし、それはあくまでもマクドナルド個人の栄達であって、彼らと深く結びついていた非国教派の価値は復権することはなかったのである。

(4) マーティン・シーデルはこうしたいわば条件付きの平和主義をpacifismという造語で呼び、絶対平和・非暴力主義のpacifismと区別している。Martin Ceadel, *Pacifism in Britain 1914-1945: The Defining of a Faith*, Oxford University Press, 1980, pp.3-5.

戦的態度を取る者が多数いた。指導部層においても、戦後党首となるクラインズやリチャード・バーカーは戦争を支持した。政治的影響力のある英国社会主義団体の中で唯一、第一次大戦に反対したのが独立労働党であったのは確かだが⁽⁵⁾、マクドナルドら党執行部は戦争反対の大衆的キャンペーンを行なうことを忌避し、反戦ではあるが英国が勝利することを期待した。全般的に見て、当時の英国左翼は第一次大戦に対してどのような一貫した立場で望むべきか、そのプランを欠いていたのであり、積極的な反戦運動は個人のレヴェルで行なわれたにとどまったのである⁽⁶⁾。

にもかかわらず、独立労働党には反愛国主義とのイメージが付き纏った。殊にマクドナルドは、「反戦派 (dissent) のリーダーとしてアイデンティファイされていた」⁽⁷⁾。15年9月の党大会は労働組合勢だけでの開催という異例の事態であったが、さらに翌16年1月の年次党大会においても、労組選出代議員から独立労働党への非難の発言が相次いだ。最も象徴的であったのは、当時の党執行委員会議長でもあった鉄道労働者ジョン・J・ウォードルの発言である。執行委員会を代表してウォードルは、「この18ヶ月間、戦争の問題はこの国の労働勢力と執行委員会のメンバーを分裂させてきている」とした上で、直前のマクドナルドの発言の優柔不断ぶりを糾弾し、「誰が労働運動 [ここでは大文字のLabour Movement] を代表して語る権利を持っているのか？ 独立労働党という小さな同人会 (the small coterie) であろうか、それともこの国の偉大なる労働組合 [ここでも大文字のTrade Unions] であろうか？」と述べたのである⁽⁸⁾。この討論の終わりには、「戦争の成功裡な遂行においてできるかぎり政府を援助することを大会に要求する」旨の動議がおよそ150万票対60万票の大差で可決されている。

もちろん、草創期の労働党において理念・実践の両面で独立労働党の果たしてきた役割は、「小さな同人会」のそれなどにとどまるものでは決してなかった。1893年の結党以来、独立労働党は関嘉彦の言う「社会主義を名のらぬ社会主義の団体」として⁽⁹⁾、さほど急進的でない労働運動家たちの心情にも配慮しつつ社会主義の漸進的な実現を目指し、フェビアン協会のような知識人団体ではなく強固な地方組織を有して、労働党の結成・伸長に大きく貢献してきたのである。しかし、ウォードルの「小さな同人会」という決め付けは少なくとも、労働党結党以来の社会主義者と労働組合

(5) 1914年8月、労働党と労働組合会議 (TUC) は産業休戦に合意し、労働党は国政選挙の休戦協定にも応じた。また、執行部に反戦主義者も含まれていた英国社会党 (British Socialist Party) も、「党は戦争遂行が迅速かつ成功すべき問題であることを望むのが当然である」という宣言に署名した。Paul Ward, *Red Flag and Union Jack: Englishness, Patriotism and the British Left*, The Boydell Press, 1998, p.121.

(6) ポール・ウォードは、当時の反戦左翼を大まかに3つに分類している。第1は、政治的観点からの反対者で、世界戦争の原因になるとされた秘密外交に反対した非社会主義者の団体「民主的制御連合 (Union of Democratic Control)」がこれに含まれる。第2は、キリスト教の影響を受けた平和主義者で、後に労働党党首となったジョージ・ランズベリーが代表的である。第3は、戦争の原因を社会主義的観点から見ていた人々で、英国社会党、社会主義労働党 (Socialist Labour Party) のほか、独立労働党の一部の者もこれに含まれる。Ibid. pp.127-8.

(7) Brock Millman, *Managing Domestic Dissent in First World War Britain*, Frank Cass, 2000, p.9.

(8) Labour Party, *The Labour Party Report of the 15th Annual Conference at Bristol*, 1916, p.103.

(9) 関 嘉彦 『イギリス労働党史』, 社会思想社, 1969年, 45-7頁。

という二大潮流の対立が抜きさしならないものになっていることを雄弁に物語るものではある。

だが他方で、幸か不幸か、直接的には第一次大戦への態度をめぐるこの対立は、他の欧州大陸のいくつかの社会民主主義政党におけるように党そのものの分裂という事態にまでは立ち至らず、この騒乱を経ても労働党の統一は維持された。だが後で述べるように、独立労働党はこの統一維持の言わばある種の代償として、物心両面において労働党内における先の支配的地位を急速に喪失してゆくことになったのである。このことはただ単に、英国労働党内における一政治勢力の衰退を意味しただけではない。独立労働党の衰退は、主として非国教派キリスト教を奉じる活動家たちによって推進された19世紀後半の労働運動・社会主義が「正当性」を失い、より世俗的な含意を持つ社会主義理念 それを主導するようになったのがシドニー・ウェブであった に取って代わられたことをも、意味したのである。1918年2月の臨時労働党大会における党規約の改正 いわゆる「クローズ 社会主義」の成立 は、この社会主義の世俗化を象徴する事件であったのである。

2 19世紀における宗教生活の意外な持続と発展

近代化・工業化・都市化の進展とともに社会生活の世俗化が進行し、人々の宗教的世界観が後退して礼拝への出席などに代表される宗教行動も衰退してゆくであろうというのは、古くからよく知られた社会学的命題である。けれども、1870年までの時代においては英国では、民衆のキリスト教的な世界観への効果的な挑戦はほとんどなかった。大多数の民衆は、確信を持って祈れば世界の行方を変えることができる、自分の全ての行いは最後の日に開かれるであろう偉大な本に記録される、死せる我が子はキリストの腕に抱かれて眠ると信じていた。信仰の選択はいまだ普通は、英国国教会か非国教派かローマ・カトリックかをめぐるものであって、キリスト教か無信仰かをめぐるものではなかったのである⁽¹⁰⁾。かのチャールズ・ダーウィンですら無神論者になったことはなく、死の直前にはキリスト教信仰に回帰した⁽¹¹⁾。

民衆の宗教生活は19世紀前半にも存続したのみならず、むしろ全国的規模で拡大・深化すらしめたのであり、いわば宗教の復権とでも言うべき様相を呈した。そして、その宗教拡大の恩恵を概して享受したのが、ニュー・ディセント (New Dissent) と呼ばれた一連の新興非国教宗派であった。18世紀初頭から19世紀中葉にかけての会派数の変化を比較した表1に如実に示されているように、イングランドにおいて非国教派は会派数を全体としてほぼ10倍に増やしている。「ディセント」と

(10) Frances Knight, *The Nineteenth-Century Church and English Society*, Cambridge University Press, 1995, p.24. もちろん、近代科学的知識を持つがゆえにキリスト教的な世界観に懐疑的なミドル・クラスも数多くいた。けれども、その場合でも懐疑は、社会的制裁の対象ともなる「無神論 (atheism)」として表明されることはなく、「不可知論 (agnosticism)」と自称するにとどまったのである。そうした「不可知論者」の代表例としては、後でも取り上げる作家のジョージ・エリオット (メアリアン・エヴァンズ) や後の労働党党首クレメント・アトリーなどがいた。

(11) Maurice Cowling, *Religion and Public Doctrine in Modern England Volume : Accommodations*, Cambridge University Press, 2001, p.399.

表1 イングランド(モンマスシャー含む)における非国教会派数の変化

	1715-1718	1773	1851
長老派 (Presbyterian)	637		142
ユニテリアン (Unitarian)	-	} 741	202
独立教会派 (Independent)	203		2,604
パーティキュラー・バプティスト (Particular Baptist)	206		
ゼネラル・バプティスト (General Baptist)	122	} 378	} 2,347
セブン・デイ・バプティスト (Seven-day Baptist)	5		
クエーカー (Quaker)	672	563	363
ウェスリー派メソヂスト (Wesleyan Methodist)	-	-	6,151
その他のアルミニウス派メソヂスト (Arminian Methodist)	-	-	4,323
その他の非国教会派	-	-	885
全 体	1,845	1,685	17,019

出所: Michael R. Watts, *The Dissenters Volume : The Expansion of Evangelical Nonconformity 1791-1859*, Clarendon Press Oxford, 1995, p.23.

は国教会に対する宗教的不同意者、つまり非国教徒 (Nonconformist) とほぼ同義であるが⁽¹²⁾、宗教改革期に宗派の起源を持つオールド・ディセントの諸派 (長老派、バプティスト、ユニテリアン、クエーカーなど) に対して、ニュー・ディセントは18世紀のメソヂズム運動などに端を発する諸派 (ウェスリー派メソヂスト、原始メソヂスト、会衆派Congregationalistなど) を指す。内訳としては、長老派・ユニテリアン・クエーカーが著しく会派数を減少させて衰退し始めているのは対照的に、最大勢力にのし上がっているのが諸派メソヂストであり、また、オールド・ディセントの中ではバプティストが会派数をほぼ10倍化している。

かつて非国教諸派は教義的には、カルヴィニスト (会衆派、長老派、ほとんどのバプティスト)、アルミニウス派福音主義者 (メソヂスト、一部のバプティスト、多くのクエーカー)、より特異な神学 (ユニテリアン、スウェーデンボルグ派) といった区分が存在したが、19世紀に入って教義としてのカルヴィニズムが衰退するにつれてその区分は曖昧化していった⁽¹³⁾。むしろ19世紀において特筆すべきなのは、職業的な特性 この頃次第に「階級 (class)」と呼ばれらわされていったものと宗派選択の相関関係である。表で見たようなヴィクトリア中期の宗教復活は、一般にはミドル・クラスが担ったものとされているが、新興工業都市の商業的・知的エリートが帰依したのは主として、ユニテリアンとクエーカーであった。彼らは、銀行家・商人・工場経営者 (特に繊維産業) において傑出し、宗派内結婚を通じて経済的地歩を固めていった。

(12) 19世紀に入って、非国教諸宗派が反対勢力というより独自の宗教団体としての体裁を整えてくるにつれて、また非国教諸派内部の組織・運動上の分岐がはっきりしてくるにつれて、ディセントは次第に「自由教会 (Free Churches)」という呼称に取って代わられてゆく。Dale A. Johnson, *The Changing Shape of English Nonconformity, 1825-1925*, Oxford University Press, 1999, p.4. これらに対して、同じく不同意者を意味する言葉であるNonconformistや、チャーチの対語としての「チャペル (Chapel)」は通時代的に用いられた言葉のようである。

(13) Hugh McLeod, *Religion and Society in England, 1850-1914*, Macmillan, 1996, p.31.

社会主義の世俗化と第一次世界大戦（尾上正人）

これに対して、福音主義（Evangelicalism）と総称される非国教派、すなわち会衆派・バプティスト・メソジストは、より低所得の社会階層に多くの信者を獲得していった。表2は、リーズにおける19世紀中葉の生時洗礼・婚姻の登録史料から割り出した男性ウェスリー派メソジストの職業構成である。ウェスリー派の中では高度熟練労働者が実に4分の1前後を占めるほか、ホワイトカラー・労働貴族・低度熟練・織工・不熟練を含めて労働者階級全体では（内訳の変動はあるが）一貫して6～7割を占める。つまり、18～19世紀の宗教復権で躍進した宗派は、その大宗を労働者階級成員（ホワイトカラーを除くとしても）に負っていた。ユニテリアンやクエーカーが富裕な少数者の宗派として現世的繁栄の中にあっただのに対して、福音主義諸派はどちらかと言えば無学の労働者大衆の間に支持者を広げていった。やや単純化すれば、非国教内宗派の大衆の人気と、その宗徒の経済的繁栄度との間には負の相関関係が見られたのである。

表2 リーズにおける男性ウェスリー派宗徒の職業（1810～1869年、縦パーセント）

	1810-9	1820-9	1830-9	1840-9	1850-9	1860-9
ジェントルマン	-	-	-	0.7	0.7	0.4
ビジネス	3.4	2.1	1.9	4.9	4.9	4.9
専門職	-	0.3	-	1.0	1.1	0.8
農場主	2.1	0.3	1.0	1.4	1.1	2.9
食料・小売	5.5	8.8	8.3	20.8	22.1	17.7
a 織物業者	14.7	9.3	7.0	0.7	-	-
ホワイトカラー	5.8	2.4	6.8	17.0	15.6	20.2
労働貴族	4.2	5.6	5.8	5.2	3.2	10.3
高度熟練	20.5	30.0	22.6	24.0	24.6	24.7
低度熟練	27.9	21.4	27.2	18.1	20.9	14.0
下級	11.6	11.7	6.0	-	-	-
[織工]	[10.5]	[11.1]	[5.6]	[-]	[-]	[-]
不熟練	4.2	8.2	13.3	6.2	6.0	4.1
[労働者]	[2.4]	[6.1]	[7.5]	[2.1]	[3.2]	[1.2]
	100	100	100	100	100	100

出所：Watts, *op.cit.*, p.600.

1851年の宗教センサスから地域的に大まかに括れば、バプティストと会衆派はイングランド南部・東部の大部分で支配的であるのに対して、メソジスト（特にウェスリー派）はイングランド北部・中西部の炭鉱地帯およびコーンウォールに覇を唱えていた。だが、より細かく都市部・農村部という区分で見ると、より複雑な様相を呈してくる。大都市や、古くからの大聖堂のある街では依然国教会が支配的であったが、工業化とともに発展した新興都市、マンチェスター・バーミンガム・リーズ・ブラッドフォード・レスターなどは非国教派の手に落ちた。つまり、産業革命以後の工業発展と福音的非国教徒拡大の間には一定の地理的重なりが見られたことになる。工業化は人心を宗教の影響から一路解放したというよりもむしろ、もともと国教会の影響力の小さい地域で人口を激増させ、非国教派の伸長に寄与したのである。他方、農村部では、概して地主の権力が弱くて土地所有が分散しているところで非国教派は拡張した。殊に19世紀前半におけるメソジストの農村部への浸透は著しいものがあった。総じて、非国教派は、地主の権力が弱い農村、工業の根

づき始めている地方都市，国教の影響力が弱い地域などに広がっていったのである。

他宗派についてもごく簡単に触れておくと，国教会は，上記の非国教諸派の拡張によって18世紀後半には文字どおりの「国教」・エスタブリッシュメントとしての地位を失い，新教一宗派へと転落していったのである⁽¹⁴⁾。とは言え国教会は，新興の非国教派と比べて目立ちにくくはあるが，日曜礼拝への出席などには現れない形で，その支配下の民衆の生活を隠然と規定する存在であった。19世紀を通じて，国教会はイングランド北部よりも南部で強く，また概して都市部よりも農村部で強固であった。また，社会階層的には，例えば企業家や専門職層の家族のような，上層ミドル・クラスに基盤を持っていた。これとは対照的に，ローマ・カトリックは貧困・低所得層に浸透してゆき，いわば「スラムの宗教」としての性格を帯びていった。カトリックは，アイルランド移民の多いリヴァプールなどで構成比が高かったが，ロンドンなど他の大都市でも急速に影響力を強めてゆく。これが20世紀ともなると英国民の「カトリック化現象」が顕著になり，1970年には新教徒総数と旧教徒の割合が逆転する。やや先走って言えば，労働者階級の中で無視し得ない勢力となったカトリック教徒への配慮から，労働党は当初の非国教色を薄めていったと見ることもできるのである。

さて，工業化と歩調を合わせて増えていった非国教徒は，国教徒やカトリックとはかなり異なる世界観・価値システムの中に暮らしていた。国教会の教会（church）に対して非国教派の礼拝堂はチャペル（chapel）と総称されたが，チャーチとチャペルは礼拝場所の差異にとどまらず，2つの異なる生活世界をも象徴していたのであり，その両世界にはしばしば断絶が見られ，交流がないことも多かった。ジョージ・エリオットの小説『サイラス・マーナー（*Silas Marner*）』（1861年）には，このことについての印象深い記述が見られる。非国教派の一宗派から追放されて遠くの国教徒の村に隠遁した主人公サイラスは，「私は教会のことは何も知りません。私はまだ一度も教会にいったことがないのです」と告白して村人を驚かす。

(14) 欧州大陸プロテスタント諸国の中で，英国と似たような形での「国教」の凋落を見たのがオランダである。1796年に国教分離が導入され，それまでの「オランダ改革教会（Hervormde Kerk der Nederlanden）」の外部に英国で言うディセントが簇生・成長した（ルター派，メノー派，抗議派（Remonstrants），カルヴァン派など）。1899年の段階で，人口の12%（プロテスタント人口の20%）がこれら“ディセント”であった。同様にスウェーデンでも自由教会が発達し，1911年にプロテスタント人口の23%を占めていたと推計されている（その大宗は，メソヂスト派とバプティスト）。同じプロテスタント諸国でも，ドイツではこのようなことは起こらなかった。つまり，人口の圧倒的多数が「国教会（Landeskirchen）」に属し，国教会でもカトリックでもないキリスト教徒は，1871年に人口の0.2%にすぎなかった（1890年に0.3%，1925年に1%）。このように自由教会ないし“ディセント”がほとんど成長しなかったことは，局所的には，19世紀前半にザクセンの炭鉱地帯にメソヂスト派が浸透するといった現象が見られたものの，本文の後の方で記述する自由主義的改革運動・労働運動と宗教勢力が結びつくといった英国的事態が，ドイツでは全く現われない（つまり，社会主義・労働運動が反教會的・無神論的になる）という結果をもたらした。総じて，人口比の点でも有力宗派数の点でも，英国の非国教派はオランダやスウェーデンのそれすら凌駕していたのである。Hugh McLeod, 'Dissent and the peculiarities of the English, c.1870-1914, in Jane Shaw and Alan Kreider (eds.), *Culture and the Nonconformist tradition*, University of Wales Press, 1999, pp.122-4. 特に，20世紀初頭に至るドイツの宗教社会的状況（勢力の強い国教と，それに規定された社会の急速な世俗化）については，野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』，講談社学術文庫，1997年が大変詳しい。

「ないんですって？……あなたの生まれたところに、教会の無いってはずはないじゃありませんか」

「ええ、そりゃありました……教会はありました　たくさんに　大きな町でしたからね。でも私は、それはなにも知らないのです　チャペルへはゆきましたが」

ドリー〔村人〕は、この新しい言葉に、すっかりまごついてしまった。だがその「チャペル」というのが、なにか悪者たちの寄り集まる場所の意味ではないか、と思ったので、それから先たずねるのが、少々気味悪く思った⁽¹⁵⁾。

1914年以前には、後にも述べるように国教会と非国教派の断絶が、変数として場合によってはいまだ「階級」よりも深い社会的・政治的重要性を持っていたのである。商人あるいは専門職層のコミュニティの一部を除けば、大部分の地方において、個々の国教徒と非国教徒とが社会的に接触することは極めて稀であった。

3 非国教派と自由労働主義

上で見たようにヴィクトリア期の非国教派は、一方で、新興の資本家や専門職層など当時で言うところのミドル・クラスに大きな地歩を占めつつ、他方で、工業化の進展とともに激増してゆく新興都市の労働者の中の、国教会が組織化できていないかなりの部分にも宗徒を広げていった。そして、このように労使が宗派を同じくする場面が多く見られたことから、それがこの時期の労使協調路線の　後に新組合主義（New Unionism）によって否定されていった路線の　一つの基盤となり、またミドル・クラスが奉じる自由主義を、またその体現者である自由党を労働者も支持するという事態が　いわゆる「自由労働主義（Lib-Labism）」　生じたと考えられるのである。

18世紀末・19世紀初期の急進主義的改革運動は、労働者階級よりもむしろミドル・クラスの非国教徒によって担われた。これは、新興ミドル・クラスの貴族社会への（またその政治的表現である保守党への）造反という意味を持ち、議会の腐敗・汚職や軍事的失態などに対する大衆の憤激を組織化していった⁽¹⁶⁾。非国教派ミドル・クラスの運動は自由主義と、またその政治母体である自由

(15) George Eliot, *Silas Marner*, 1861. 土井 浩（訳）『サイラス・マーナー』、岩波文庫、1988年、154頁。この小説にはそのほかにも、国教徒と非国教徒の生活上の断絶に関して興味深い記述が多い。大人の男女の洗礼しか見たことがないサイラスは、「命名（christen）」という言葉の意味も呑み込めなかった　「彼は、自分の見たり聞いたりしたところだけでは、どうしても、ラヴィロウ〔村〕の宗教が彼のもとの信仰と同一のものであると、思うことができなかつた」（同書、234頁）。また、国教徒の村人の側でもサイラスの宗教が同じ新教とは信じられず、「それではあんたのも、同じ聖書なんですね。確かですか、マーナーさん　あんたがくからもってきたという聖書は　私たちが教会へ持っていったり、エビーさんが今教わっているのと、同じなんですね」（同書、264頁）と問い詰めている。ここに描かれた状況はもはや、同一の神を別様に信仰していたというよりも、ローカルで外部に移転不可能な「ネイティブな神々」が信仰されていたと見なすべきだとさえ言われる。K. D. M. Snell and Paul S. Ell, *Rival Jerusalems: The Geography of Victorian Religion*, Cambridge University Press, 2000, p.1.

(16) John Belchem, *Popular Radicalism in Nineteenth-Century Britain*, Macmillan, 1996, p.28.

党と密に結合していた⁽¹⁷⁾。1862年1月の『ブリティッシュ・クォーターリー・レビュー』は、「ディセントなくして自由党は全くあり得ないであろう」と記している⁽¹⁸⁾。自由党の標榜する自由貿易主義は、単なるその世俗的意図を超えて、創造主は世界の全勢力を神意によって確立し誠意をもって監督してきたのだという非国教徒の確信を経済学に適用したものと見ることもでき⁽¹⁹⁾、国教徒とは対照的な彼らのコスモポリタニズムを表現していた。また、自由党の理念的な反国家主義・不干渉主義も、非国教徒の反国教・国教否認（disestablishment）の立場と軌を一にしていたことは見やすい道理であろう。

ピータールー虐殺への抗議、カトリック教徒解放、奴隷貿易反対など、自由主義運動の先頭には常に非国教徒のミドル・クラスがいた。その頂点をなした第1次選挙法改正は、イングランド北部の新興工業都市群において経済的影響力を振るう非国教徒ミドル・クラスの意向を反映したものであり、貴族勢力・国教会・保守党のエスタブリッシュメントから彼らへと、部分的にはあるが国家権力が委譲されたことを意味した。選挙法改正後、前節で強調したユニテリアンやクエーカーの商人・専門職層は、ホイッグ党と良好な関係を構築し、市民的政治的自由、民衆道徳の改善、地方都市自治体の構造改革など、共通のアジェンダを追求していった。次に来た大きな自由主義運動の波は反穀物法同盟であったが、その中核的指導者ジョン・ブライトはユニテリアンであり、リチャード・コブデンは国教徒であったけれども彼の積年の同志たちは急進的ディセンターであった。ジョン・ブライトの指導下に、労働組合とミドル・クラス急進主義が同盟する最初の機会が訪れたのである。

もちろん、この時期の労働運動の大潮流としてチャーティズムがあったわけだが、これら非国教徒ミドル・クラスは、チャーティストたち、またロバート・オーウェンに対しては比較的冷淡な態度を取った。1840年代初頭には、非国教徒を中心に「全国完全選挙権同盟（National Complete Suffrage Union）」が結成され、労働者の改革運動とミドル・クラスのその統一を模索し、42年には人民憲章の6項（一年制議会・普通選挙・平等な投票区・財産制限撤廃・秘密投票・議員有給制）を採用した。しかし、ミドル・クラス非国教徒とチャーティズムの指導者（殊にファーガス・オコンナー）との間には武力路線の是非などをめぐって対立が生まれ、前者はチャーティズムから距離を置いてゆくことになる。ミドル・クラスは、チャーティズムが階級を前面に押し出す運動であるために、宗派に分断を持ち込まれることを恐れたのだとも言われる。また、オーウェンに対しては彼自身は決して今日言うところの無神論者ではなかったが、ミドル・クラス非国教徒は「不信心（infidel）」との悪印象を抱いており、それが英国において労働運動と社会主義の架橋を妨

(17) 全国レベルでは、自由党指導者は19世紀末まで国教徒が占めてきたが、自由党下院議員に占める非国教徒の割合は漸増傾向にあった。さらに、地方自由党における非国教派の影響力は絶大なものがあった。McLeod, 1999, *op.cit.*, p.130.

(18) *British Quarterly Review*, L (January 1862), pp.220-1.

(19) Boyd Hilton, *The Age of Atonement: The Influence of Evangelicalism on Social and Economic Thought, 1785-1865*, Clarendon Press Oxford, 1988.

げてゆく遠因ともなった⁽²⁰⁾。

さてチャーティズムに限らず、1848年はヨーロッパの革命・改革運動にとって大きな転換点になったとされ、ホブズボームなどによれば、これ以降、ブルジョアジー（ミドル・クラス）とプロレタリアートの同盟関係が終わりを迎え、前者が支配階級の一翼として保守化・体制内化していったとされている。けれども、こと英国に関するかぎり、チャーティズムの挫折は必ずしも階級間同盟の終わりを意味しなかった。このあと、チャーティズムのような一種早すぎた階級主軸の政治アジェンダはむしろ後景に退き、19世紀末の新組合主義の登場まであるいは、もっと言えば第一次大戦後まで、再浮上することがなかったのである。19世紀後半、英国では自由党ミドル・クラスと労働者階級・労働運動の同盟関係が非国教を仲立ちとして再構築、さらには強化されさえした。その結果生まれたのが、他国に比べて階級闘争色が非常に薄い労働運動、いわゆる自由労働主義である⁽²¹⁾。

自由労働主義と非国教諸派の結びつきは、保守党と国教派のそれ以上に強固なものであった⁽²²⁾。特に自由労働主義が強かったのは中東部の孤立した炭坑地帯・漁村・農村のコミュニティであり、そこでは以前から原始メソディストが普及していた。とりわけ19世紀後半の炭坑での自由主義は、坑夫たちの強いメソディスト派信仰と関連があった⁽²³⁾。また、同様に自由労働主義の開花に大きな役割を果たしたのが会衆派で、神学と政治的態度の双方で自由主義的であり、熟練労働者や組織された労働運動の指導者たちの中で支持を得ていた。教育その他の社会問題において、会衆派の政教分離主義は自由労働陣営の典型となった。会衆派その他のオールド・ディセントは、自由主義と労働組合主義の知的収斂の手段を供給したのである。会衆派の当時の有名な労働運動家としては、ボイラー工組合（Boilermaker's Union）のロバート・ナイトなどがいた。自由労働派として選出された自由党下院議員（Lib-Lab MP）は、その多くが肉体労働者から労働幹部・オルグへと独学

(20) Peter Joyce, *Realignment of the Left? A History of the Relationship between the Liberal Democrat and Labour Parties*, Macmillan, 1999, p.21. オーウェンは1817年に「人類愛の宗教」を説いて地上の楽園（ミレニアム）を志向したが、他方で彼を実践的キリスト者とする見方も当時あった。彼の「一番弟子」である元ユニテリアンのジョン・フィンチはオーウェンを「メシア」と祭り上げ、他宗派を「むなしい思弁を教えるセクト的な諸宗教」と排撃している。John Finch, *The Millennium: The Wisdom of Jesus, and the Foolery of Sectarianism in Twelve Letters*, 1837. 見市雅俊（訳）「千年王国」、都築忠七（編）『資料イギリス初期社会主義 オウウェンとチャーティズム』、平凡社、1975年、213-7頁。リヒトハイムは、オーウェンがメソディストの工場主だけでなく労働者たちにも嫌われていった様子を巧みに伝えている。George Lichtheim, *A Short History of Socialism*, Praeger, 1970. 庄司興吉（訳）『社会主義小史』、みすず書房、1979年、49頁。

(21) 自由労働主義は、従来の日本の英国労働史研究では十分に掘り下げられてきたとは言えない領域であったが、最近の研究として、鈴木光重『近代イギリス自由労働主義の研究』、御茶の水書房、1999年がある。鈴木によれば、「自由労働主義とは現象としては労働者が様々な問題や下院議員選挙をめぐって中産階級の自由主義勢力と協力するようになったことである」（同書、i頁）。

(22) マクレオドによれば、1900・1906年・1910年の3回の下院総選挙の立候補者のうち、国教徒の64%が保守党員または自由党系労働組合員として立ち、非国教徒の91%が自由党員、自由労働派または（1906年以降は）労働党員として立った。McLeod, 1996, *op. cit.*, p.91.

(23) Alastair J. Reid, *Social classes and social relations in Britain, 1850-1914*, Cambridge University Press, 1995, p.29.

により転身を遂げたもので、その半数以上は坑夫経験者であった。非国教派（特にその禁酒運動）に影響されて、自由労働派議員は労働者的でありつつピューリタンであり、ヴィクトリア期の労働者家庭において第一の徳とされていた「立派さ（respectability）」を体現しようとした⁽²⁴⁾。

自由労働主義は、チャーティズムに見られたような戦闘的でもた脱宗教的（世俗的）な急進主義の運動とは一線を画し、自らを組織労働者の「立派な（respectable）」運動と位置づけた。先にも触れたように、往々にして非国教徒の中に労働者と宗派を同じくする工場経営者・企業家（ミドル・クラス）がいたことから、階級対立は緩和されることになった。自由労働派は労使の利害の一致を説く自由主義であり、その主張は「労働貴族」とも呼ばれるようになった熟練労働者のクラフト・ユニオニズムに特に訴えるものであった⁽²⁵⁾。このように、19世紀後半の英国労働運動には、同時期の欧州大陸諸国に見られたような戦闘的無神論ないし反教会主義は非常に稀であり、英国はキリスト教が保守勢力と同化せず、むしろ労働運動（場合によっては社会主義）と両立・同居するヨーロッパでは特異な国となったのである⁽²⁶⁾。アトリーの言を借りれば、「他のいかなる国においても、英国ほどにはキリスト教が社会主義に転向することはなかった。いかなる他の社会主義運動においても、キリスト教的な考えがこれほど強力な発酵効果（leavening effect）を及ぼすことはなかった」⁽²⁷⁾。

自由労働主義とは、フォーマルな政治舞台での自由党と労働勢力の融合を指したものだが、より身近な日常生活のレベルでも、非国教派ミドル・クラスと労働者階級の接触の場が多く見られた。福音主義非国教徒は盛んに海外伝導活動を行なったが、国内的にはこの同じ布教活動が、一種のセツルメント、つまりミドル・クラス主導による労働者生活の改善運動の形態を取ることであった。具体的には、日曜学校（Sunday Schools）での労働者子弟の教育活動、禁酒運動（temperance

(24) 国政的には、自由労働派に代表される非国教派を介した階級間同盟を象徴したのがグラッドストーンの主宰した数次にわたる自由党政権であった。グラッドストーン本人はもともと高教会派（High Church）に属した国教徒であったが、自由主義と道徳十字軍を同一視し、労働者階級の信念と態度に影響を及ぼしていた非国教派を自由党の政策と結び付け、労働者から絶大な支持を取り付けることに成功した。1867年と84年の選挙法改正は都市部・農村部の多数の労働者男性に選挙権を拡張したが、「最初の労働党」とも称されるグラッドストーンの自由党は、炭鉱地帯など労働者の集住する地域および、特に非国教派の宗教的同質性の高い地域で得票率が高かった。

(25) 「労働貴族」という定式化にも現れているような旧来の否定的な自由労働主義評価は、後期ヴィクトリア時代の「立派さ」を初めとする文化的特色が社会史的に探求されるにつれて、また、チャーティズムを英国の「階級的」労働運動の範型と見なすパースペクティブに疑義が発せられることが多くなるに及んで、退潮し始めている。本稿では特に、その労使協調路線の根拠に宗教的背景があったという立場から、自由労働主義の再考を試みているのである。なお、「労働貴族」をめぐる論争については、松村高夫「イギリスにおける労働貴族論争」、『日本労働協会雑誌』No.340、1987年、34-45頁にコンパクトに整理されている。

(26) 英国とは対照的に、欧州大陸では社会主義は自動的に無神論のしるしであった。Alan Wilkinson, *Christian Socialism: Scott Holland to Tony Blair*, SCM Press, 1998, p.245. このことを逆方向から見れば、英国では大陸諸国とは異なって、キリスト教を掲げる保守大政党もまた生まれなかったのである。浜林正夫『イギリス宗教史』、大月書店、1987年、239頁。

(27) Clement R. Attlee, *The Labour Party in Perspective*, Victor Gollancz, 1937, p.28.

movement) などである。ここでは前者だけを例に取ると、イングランドにおいて、19世紀初めには日曜学校に登録された子供の数は約20万人であったが、これが1833年には約150万人、51年には約260万人へと10倍化した。1840年代までに、5歳から15歳までの子供の半数が日曜学校に登録されるようになった。そして、1850年までに非国教派への宗教的転向者の実に20%が日曜学校を経由したものになった。日曜学校は禁酒運動と同様、労働者階級の子供たちに辛い貧困からの脱却の道を教え、その子供が社会階層を上昇するための階梯の最初の段を与えたのである⁽²⁸⁾。

4 キリスト教社会主義，そして独立労働党

自由労働主義とほぼ時を同じくする意義ある潮流として、キリスト教社会主義（Christian Socialism）を取り上げないわけにはゆかない。キリスト教社会主義は、チャーティズム壊滅の後を受けたより穏健な社会運動という点では自由労働主義と19世紀後半という時代背景を共有していると言えるが⁽²⁹⁾、宗派横断的であった点、より明示的に社会主義を唱えた点、労働者階級の中に強固な影響力を持ち得なかった点などで区別される。やや逆説的ではあるが、キリスト教社会主義が概ねミドル・クラスの運動に終始せざるを得なかった点にも本稿は英国社会主義の特質を見るのであり、またそうした社会主義の大衆的基盤の脆弱性は、次に現れる独立労働党の活動にとって一つの桎梏となってゆくのである。

キリスト教社会主義は、19世紀中葉、政治経済学が衰退し始めるとともに代替的神学イデオロギーとして登場した。つまり、前述のヴィクトリア中期における宗教の復権と軌を一にした動きと一応は見る事ができるが、非国教派自由主義が政教分離思想に根ざす強固な反国家主義を標榜したのに対して、キリスト教社会主義は概して言えば国家に対してより肯定的な見方をしていたところに大きな特徴がある。それは、キリスト教社会主義が非国教徒だけの運動ではなかったことに一因があるのであり、現に最初のキリスト教社会主義者たちは多くの国教会・カトリックの牧師・司祭たちで構成されていた。実際、19世紀末のキリスト教社会主義の推進団体となった「キリスト者社会連合（Christian Social Union）」（1889年結成）の主宰者となったスコット・ホランド（1847-

⁽²⁸⁾ E・P・トムスンなどに典型的なように、日曜学校はブルジョアジー（ミドル・クラス）が労働者階級に工場労働の規律を教え込むことを目的としたものだと機能的な見方もある。Edward P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, Penguin Books, 1988, p.141. だが他方で、トマス・ラキュアのように、日曜学校の教師・スタッフの多くが労働者出身であることを強調し、日曜学校は「立派な」労働者子弟を輩出するための「立派な」労働者自身の要塞であったとする見解もある。Watts, *op. cit.*, pp.301-2.

⁽²⁹⁾ 19世紀前半にも、同じく「キリスト教社会主義」の名を冠せられる協同組合運動が存在した。F・D・モーリス、チャールズ・キングスリー、J・M・ラドロウに代表されるそのグループは、「飢餓の40年代」における労働者の惨状に触発され、無神論の支配するチャーティズムに対抗意識を持ちながら協同組合工場の経営に腐心したが、「1854年までに全く消滅した」。G. D. H. Cole, *A Short History of the British Working-class Movement, 1789-1947*, George Allen & Unwin, 1948. 林健太郎・河上民雄・嘉治元郎（訳）『イギリス労働運動史』、岩波書店、1953年、35-6頁。今日ではマルクスのもととされている「宗教は人民の阿片」なる有名な格言も、もともとは上のキングスリーが言ったものらしい。

1918)やチャールズ・ゴア(1853-1932)は、自由主義的カトリック教徒であった。しかし、会員の大衆は国教徒であった。キリスト者社会連合は、フェビアン的な研究教育機関として会員に講義や説教を行い、パンフレットを発行して救貧法や労働組合など多彩な話題について会員を導いた。

キリスト教社会主義は、貧困・道徳的墮落などの社会問題を宗教的に論難するだけでなく、より踏み込んで、そうした状況を作り出すものとして個人の罪だけでなく「団体(corporate)」の罪をも問題にした。さらに、それには留まらないキリスト教社会主義の社会主義的組織としての最たる主張が、後に労働党も1918年に「クローズ」として定式化することになる「産業の公的所有(public ownership)」であった。1908年にキリスト者社会連合が発行した『キリスト教と社会主義(Christianity and Socialism)』は、社会主義の倫理的原理がキリスト教のそれと等しいと明記した上で、「集合的所有(collective ownership)」を唱えた。これら公的所有の主張は部分的には、1918年に出された「キリスト教と産業問題(Christianity and Industrial Problems)」と題する国教会大司教調査委員会(Archbishops' Committee of Inquiry)の「第5レポート」にも結実したのである。むろん、こうした主張は全ての教会関係者の是とするところとはならなかったが⁽³⁰⁾、国教会の公式文書すら無視し得ないほどのキリスト教社会主義の隆盛を物語るものと言えよう。個人的には、特に強固に産業の公的所有を唱えたのがウィリアム・テンブル(1881-1944)で、その戦闘的主張のために彼はマンチェスター主教の地位に就くことを断念せざるを得なかった⁽³¹⁾。

このように国教会を中心に他宗派をも巻き込んでキリスト教社会主義は19世紀末から20世紀初頭にかけて隆盛を見たのだが、上層ミドル・クラス中心の同人団体的運動であって、広範な労働者大衆に社会主義思想を注入する役割を果たすことができず、また特に工業基盤の厚いイングランド北部に支持者を広げることができなかった。しかし他方で、国教会主体の運動であったことから、非国教派の自由主義者に見られたような国家権力への強い反感を持たず、そのために比較的早期に産業の公有化・国有化思想を唱えることが可能な体質を有していたと考えられるのではなからうか。

さて、キリスト者社会連合とほぼ同じ19世紀末に、非国教派色の強い労働者組織として登場したのが、独立労働党である。「独立(independent)」とは文字どおり、自由党からの独立を、国政選挙等で自由党と共同歩調を取ってきた労働運動の依存体質からの脱却を意味する。つまり、独立労働党は結成当初、自由労働主義に対する批判勢力としてのアイデンティティを強く有していた。通説的なことではあるが背景には、新組合主義と呼ばれた主として不熟練労働者の運動が勢力として大きくなり、旧来の労使協調路線への不満が高まってきたことが挙げられる。と同時に、非国教派を奉ずる活動家が多かったという点では、自由労働派と宗教的背景を同じくしてもいた。アトリーも指摘したように、「その活動的メンバーは、仕事に使徒のような(apostolic)情熱を注ぎ込んだ。それは何か、宗教的団体のような性質を帯びていた」⁽³²⁾。

草創期の独立労働党は、スコットランドの非国教徒に指導されたものであった。とは言え、独立

⁽³⁰⁾ G. I. T. Machin, *Churches and Social Issues in Twentieth-Century Britain*, Clarendon Press Oxford, 1998, pp.15-6, p.26.

⁽³¹⁾ テンブルは、R・H・トーニーとラグビー校・オクスフォードを通じて同期で交友関係があり、国教会牧師としてトーニーの結婚式も行なった。Cowling, *op.cit.*, p.274.

労働党でスコットランド人のメンバーが特に多かったわけではない。1893年の結党大会における120人の代議員のうちで、スコットランド組織の代表は11人にすぎず、ブラッドフォードやロンドンの代議員の方が多かった。けれども、独立労働党の「ビッグ4」のうち、ハーディ、マクドナルド、ジョン・ブルース・グレジャーの3人はスコットランドの生まれであった⁽³³⁾。宗派別で見れば、炭坑地域を中心にメソジストが確たる地位を占めており、国教会の党員は皆無に近かった。したがって、独立労働党は、非国教派系の有力な政治勢力としては最後のものではあったと言えよう。

独立労働党を一つの母体として労働党が作られたとは言え、労働党に結集した政治勢力・政治家個人の奉ずる宗教・宗派（無宗教・無神論も含めて）はまちまちであった とも言え、結成時1906年の下院議員の半数以上が非国教徒であった。20世紀前葉の著名な人物に限定して挙げておくと、上記のハーディ、マクドナルド、グレジャー以外の非国教徒は、3度にわたり党首を務めたアーサー・ヘンダーソンがウェスリー派メソジストであったほか、TGWU（運輸一般労働者組合）の創設に関わりチャーチル連立内閣で労働大臣を務めた労働界の総帥アーネスト・ベヴィンもこれに含まれる。しかし、『獲得社会（*Acquisitive Society*）』などの著書を残した政治学者のR・H・トニーは熱烈な国教徒であり、党首経験者のジョージ・ランズベリーも国教徒、クレメント・アトリーは懐疑的国教徒⁽³⁴⁾、1930～40年代に政界の寵児となったスタフォード・クリップスは無宗派の熱心なキリスト者であった⁽³⁵⁾。総じて、非国教徒政治家は労働者・労組出身者に集中する傾向

⁽³²⁾ Attlee, *op. cit.*, p.35. とは言うものの、独立労働党員と非国教派（とりわけメソジスト）の関係は必ずしも良好なものとは言えず、むしろ社会主義に走ることで、個人的信仰は保持しつつも、かつての信仰共同体と訣別せねばならないというパターンも多く見られた。Hugh McLeod, 'Varieties of Anticlericalism in Later Victorian and Edwardian England', in Nigel Aston and Matthew Grago (eds.), *Anticlericalism in Britain c.1500-1914*, Sutton, 2000, p. 203.

⁽³³⁾ ハーディは1856年にラナークシャーの農業奉公人（farmer servant）の非嫡出子として生まれ、極度に貧困な幼年時代を過ごした。全くの独学であり、両親は無神論者であったが本人は77年にモリソン派に入信した。7歳でメッセンジャーボーイとして働き始め、その後炭坑に入った。ハーディの生涯については、小川喜一『人類の知的遺産55 ケア・ハーディ』、講談社、1980年に詳しい。マクドナルドもロシーマウスの漁婦の非嫡出子として1866年に生まれ、小学校を出て働き始めた。19歳で大志を抱いてブリストルに出てジャーナリストとして頭角を現し、『社会主義評論（*Socialist Review*）』の編集者となった。グレジャーもまた1859年にスコットランド人農夫の非嫡出子として生誕、カルヴァン派の信者となった後、前二者とともに草創期の独立労働党に参画した。

⁽³⁴⁾ 伝記作家ケネス・ハリスは、アトリーから次のような発言を引き出している 「私[アトリー]は、宗教的感覚の持てない人間の一人なんです。[ハリスの質問](それはキリスト教について何の感慨もないという意味ですか？それとも、神・キリスト・来世について何の感慨もないという意味でしょうか？)キリスト教の倫理は信じています。わけのわからない偶像（mumbo-jumbo）を信じていることができないんです。（あなたは不可知論者であると？）わかりません。（来世はあると思われませんか？）たぶん」。Jerry. H. Brookshire, *Clement Attlee*, Manchester University Press, 1995, p.15.

⁽³⁵⁾ 第二次大戦後の人物では、党首経験者のハロルド・ウィルソン、マイケル・フットのほか、1970年代に党内左派の一時代を築いたトニー・ベンも非国教徒であった。ジョン・スミスはスコットランド長老派、トニー・ブレアはカトリック教徒である。

があるのだが、いずれにせよ労働党は多くの宗派の寄り合い世帯であったことから、ある種の宗教的多元主義を要請せざるを得なくなった。そしてこの多元主義は、社会に押し寄せる世俗化の波から社会主義勢力を守る上では、些か心もとないものだったのである。

5 社会全般の世俗化と労働党内の宗教的多元主義

18世紀後半からヴィクトリア中期にかけて非国教派を中心に復興を見たキリスト教も、19世紀後半から次第に進行した世俗化現象に押されるようになる。しかし、これも欧州大陸のプロテスタント諸国と比べれば時期的にかなり遅く、またスピードもゆるやかであった。ヒュー・マクレオドによれば、英国における宗教の衰退は3段階に区分される。1860～80年代の不信心や懐疑（いわゆる「不可知論（agnosticism）」）が広がった時代、およそ1890年代からの教会メンバーや礼拝出席が減っていった時代、最後にそれ以後の、よりゆっくりとした世俗化過程である⁽³⁶⁾。こうした宗教生活の衰退は、社会階層的にはまず、労働者世帯の上層と下層ミドル・クラスの家族から始まったとされる。前代、これらの階層に広く普及していたのが非国教派であったから、結局のところ宗教の興隆も衰退も非国教派を中心に進行したことになる。

宗派別には、衰退が最も顕著であったのはメソジストで、バプティストも宗徒数は1880年代をピークに徐々に下降し始める。会衆派は1906年までは宗徒数を減らすことはなかったが、増加率は下がっていった。1880～90年代に唯一劇的に成長したのは新宗派の救世軍（Salvation Army）で、これは第一次大戦期までゆっくりと宗徒を増やしていった。クエーカー、ユニテリアン、キリストの教会（Churches of Christ）はむしろこの時期宗徒を増やしたが、非国教徒全体に占めるシェアは微々たるものになっていたから、全体の衰退を押しとどめるほどではなかった。これとは対照的に、下層不熟練労働者世帯においてローマ・カトリックは着実に宗徒を増やしてゆき、特に新組合主義の労働運動において無視し得ない勢力となり、やがて1920年代までに都市部での労働党投票者の有力な一角を形成するに至る⁽³⁷⁾。

非国教派を中心に宗教の衰退が始まった原因はいくつか考えられるが、一つには、非国教派のピューリタンの堅苦しいイメージが大衆から敬遠され始めたということがある⁽³⁸⁾。もともと毎日

⁽³⁶⁾ McLeod, 1996, *op.cit.*, p.223. けれども、カラム・ブラウンのように、英国社会の世俗化の完成をもっとずっと遅い時期に 1960年代に 設定する論者もいる。Callum G. Brown, *The Death of Christian Britain: Understanding secularization 1800-2000*, Routledge, 2001.

⁽³⁷⁾ Andrew Thorpe, *A History of the British Labour Party*, Macmillan, 1997, p.91, p.231.

⁽³⁸⁾ Jane Garnett, 'Nonconformists, economic ethics and the consumer society in mid-Victorian Britain,' in Jane Shaw and Alan Kreider (eds.), *Culture and the Nonconformist tradition*, University of Wales Press, 1999, pp.99. ペネロピー・コーフィールドによれば、19世紀前半までの戯画に見られるイメージは、国教会の人間が「デブで、十分の一税に貪欲で、酒浸りで 痩せて無知で貧相な副牧師（curates）をいじめている」のに対して、非国教派の牧師は「ひよろひよろして、気難しく、信心深げな顔をして、騙されやすい会衆を贖の敬虔さで惑わせている」という、対照的なものであった。Penelope J. Corfield, *Power and Professions in Britain 1700-1850*, Routledge, 1995, pp.42-3.

曜日にチャペルに通う実直な労働者が、パブの享乐的労働者と対比される状況は前代からあったのだが、社会意識的に見てピューリタニズムへの反動とでも呼ぶべきものが発生してきた。マシュー・アーノルドに代表されるように、非国教派は厳格すぎて興ざめ（kill-joys）であるとの非難は、文化人の中にも普及するようになった⁽³⁹⁾。19世紀末に労働運動の一大勢力として登場した不熟練工中心の大衆的な新組合主義（New-Unionism）も、このような非国教派の厳格な禁欲主義と馬が合わなかったとされる。これと関連して第2に、19世紀末からスポーツ・レジャー・賭け事に関して新たな大衆娯楽が多数出現し⁽⁴⁰⁾、それらとの競合により、教会が社交・エンターテインメントの場としては次第に退屈で魅力ないものと映るようになったことも、世俗化進行の一つの原因である。元来、原始メソディストなど一部の非国教派は派手でエキサイティングなミーティングを催すことで労働者大衆を引き付けていた面があるのだが、それすらも世俗の新しい娯楽の勢いに押されるようになったということであろう。

実は、上記の非国教派への大衆的な批判は、ある程度まで独立労働党、後には労働党にまでも向けられていった。労働党は独立労働党を核とした設立の経緯から、実際には宗教上は多元的でありながら「厳格なメソディズム」「清教徒の党（the wowser's party）」のイメージが付き纏い、それが享楽傾向の強まっていたこの時期の労働者階級には敬遠される面があったのである。労働党が結成後も第一次大戦後まで下院議席数等で伸び悩んだのも、一つにはこうした宗教の絡んだ悪い大衆イメージのゆえであった⁽⁴¹⁾。

このようにイメージ上は非国教派色を引きずりながらも、先に見たように人員構成からすれば労働党はそもそもの太初から宗教的には多元的であった。自由党と非国教派の関係は前述のように密接なものであったが、労働党は公式にはそのような特定宗教・宗派との関係を結ばず、全体としては世俗的な政党であった。特に地方組織レベルでは労働党は全く世俗的で、古くからの非国教派系組織（自由教会や共済団体）との接触はほとんどなかった。これは一つには、再三述べてきたよ

(39) 非国教徒のJ.S.ミルですらも、『自由論』の中で、安息日厳守（Sabbatarianism）など同時代の「ピューリタニズム」について軽蔑的なコメントを残している。「清教徒が十分な勢力をもっていたところにおいては、彼らは常に、一切の公衆的娯楽と殆んどすべての私人的娯楽とを禁圧しようと努力して、かなりの成功をおさめたのであった。音楽、舞踏、公開競技会その他娯楽のための集会、および演劇は、特にそうであった。……社会の残余の人々〔清教徒でない人々〕は、当然彼らに許されるべき娯楽が、より峻厳なカルヴァン教徒やメソディスト教徒の宗教的・道徳的感情によって統制されることを、どうして歓迎することができよう。……これらのでしゃばりの信心家たち」。John Stuart Mill, *On Liberty*, 1859. 塩尻公明・木村健康（訳）『自由論』、岩波文庫、1971年、175-6頁。

(40) この時期、労働者階級に広がっていった大衆娯楽の全容については、Ross McKibbin, *The Ideologies of Class: Social Relations in Britain 1880-1950*, Clarendon Press Oxford, 1990, pp.101-66に詳しい。

(41) 労働党が1924年まで長らく政権の座に就けなかったのは、これ以外にも、指導部に多い非国教派の根深い権力懐疑あるいは反国家主義、つまりは在野主義のゆえだったとも言われる。Wilkinson, *op.cit.*, p.40. ついでながら、これとは逆に保守党は、労働者大衆の世俗化・享楽ムードを巧みに汲み取って大都市の下層世帯を中心に支持基盤を拡大していった。いわゆる「労働者階級トーリズム（working-class Toryism）」である。19世紀末から20世紀初頭にかけて、保守党支持率が特に高かったのは、ランカシャーの綿工業労働者や、ロンドンのイースト・エンド地区のような大都市貧困世帯であった。Reid, *op.cit.*, p.55.

うに労働者政党としては、労働者階級に宗徒を拡大していたローマ・カトリックや、ロンドンなど大都市の低所得者層に浸透していたユダヤ教など、他宗派に配慮せざるを得なかったということがあるが、時代とともに増えてゆく労働党の下院議員・地方議員においても、非国教派は次第に構成比を減らしていったのである。例えば、やや時代が下がるが1929年総選挙で当選した労働党下院議員249名のうち、非国教派のいずれかに属すると公言している議員は半数以下の105人であった。

しかし、労働党が非国教派離れをせざるを得なかったのには、よりイデオロギー的な事情もある。まず、上記の宗教生活の衰退・世俗化とともに、例えば禁酒運動が多くの人々の関心事ではなくなったように、政治領域全般において非国教派の影響力が弱まっていった⁽⁴²⁾。このことを端的に示したのが、自由党の衰退であったろう。また、かつて自由労働主義が掲げたような妥協的な労使協調路線は、第一次大戦直前に生じた産業不安 (industrial unrest) の頃から労働党の政策と釣り合わないものになっていった。時代は下がるが、特に1926年のゼネスト以降、労働党員はなお自由主義の支配するチャペルから足が遠のいていった。また20年代には、非国教徒の側でもボリシェヴィズムへの恐怖などから保守化が進行したのである。

このようにして、一方では社会生活全般の世俗化の進行により、また他方では労働勢力の伸長が自由主義とのイデオロギー的緊張関係を生んだことにより、非国教派の政治的影響力は衰退し、労働党の中でも結成当初の非国教派色は薄まっていった。一言で括るならば、政治対立の焦点は、宗教から階級へと移行していったのである。チャーティズムにおいて先駆的に開花していたとされる階級政治は、実に半世紀以上を経てようやく政治の表舞台に登場することになったのであるが⁽⁴³⁾、これは他の欧州諸国と比較して時期的に極めて遅かったと言わねばならない。さらに、宗教的に多元的な労働党が政権政党へと躍進してゆくにつれて、政治と宗教の分離はさらに強まった。とは言うものの、ドイツ・フランス・イタリアを初めとして欧州大陸諸国では概ね、キリスト教が保守勢力と、反教会主義（場合によっては無神論）が社会主義勢力（社会民主主義・共産主義）と結託す

(42) Neville Kirk, *Change, continuity and class: Labour in British society, 1850-1920*, Manchester University Press, 1998, p.205.

(43) 近年は数多くの英国労働史家が、階級政治の開始を、ひいては一元的・同質な労働者階級の成立自体を、従来の説よりも非常に遅い時期に だいたい第一次大戦前後の時期に 設定するようになっていく。例えば、Ross McKibbin, *Classes and Cultures: England 1918-1951*, Oxford University Press, 1998, p.101. McLeod, 1996, *op. cit.*, p.92,218. Kirk, *op. cit.*, p.196. サイモン・ガンによると、「地理的/職業的パラダイムが主要な準拠集団であった。つまり、これらが水平的ではなく垂直的に [社会成員を] 切っていたのである。したがって、『階級』はマルクス主義の意味では1918年まで目立たなかった」。Simon Gunn, 'The failure of the Victorian middle class: a critique', in Janet Wolff and John Seed (eds.), *The culture of capital: art, power and the nineteenth-century middle class*, Manchester University Press, 1988, p.20. こうした「単一の労働者階級」の出現は、労働者の外見の変化にも表れていたという 「1914年以前の労働者階級の男たちの写真は、熟練職人からレイバラーまで服装に木目細かい社会的グラデーションをはっきり表しているが、戦間期の写真や映画は、それより遥かに均質的で『同じような (identikit)』図柄を示している」。Malcolm Smith, *Democracy in a Depression: Britain in the 1920s and 1930s*, University of Wales Press, 1998, p.50.

るという構造が今日まで見うけられるが⁽⁴⁴⁾，そうした政教構造は英国では発達しなかったのである。したがって，英国的文脈での社会主義の世俗化というのは，19世紀に社会主義と考えられていたものが宗教色を脱して完全に無神論的になってゆくというよりもむしろ，かつて自由党において非国教派がそうであったような支配的宗派のない多元的状况の所産として捉えるべきなのである⁽⁴⁵⁾。

6 大戦終結，そして「クローズ 社会主義」へ

このように英国社会が全体として世俗化してゆく中で，労働党もキリスト者も他の社会諸勢力と同様，第一次大戦への態度表明を迫られてゆくことになった。本稿冒頭に見たように，労働党は内部の足並みが乱れ，大戦初期には労働組合勢力が積極的に戦争を支持したのに対して，独立労働党の少なくとも幹部は微温的な反戦の態度を見せた。個々の党员・政治家のレヴェルではさらにまちまちで，マクドナルドに代わって党首となったヘンダーソンが大戦を支持してロイド・ジョージ内閣に入閣した。無論，これが党の多数派・公式見解ということになった。また，党员作家・知識人のH・G・ウェルズとトニーも戦争支持に回ったが，後者は戦後そのことを自己批判している。より重要なこととして，もともとポーア戦争を支持したりなど帝国主義的な傾向を持っていたフェビアン協会の面々，バーナード・ショーやウェップ夫妻も戦争を支持し，入閣したヘンダーソンを積極的に支える体勢を取るようになった。この結果として，それまで労働党の構成団体でありながらそれほど表には出ず，個々のメンバーにはむしろ自由党に帰順する者の多かったフェビアン協会が，党執行部との繋がりを強め。特にシドニー・ウェップと党首ヘンダーソンのそれ，本格的に党の中枢に躍り出て政策策定に関わるようになったのである。いわば，大戦初期の戦争への態度を試金石として，反対した独立労働党から賛成したフェビアン協会へと，党内社会主義団体のヘゲモニーが移動したのである。

(44) オランダとスウェーデンは，英国に似た宗教構成であったために，反体制政治勢力と宗教が結びつくという構図が若干ではあるが見られた。すなわち，オランダでは，ルター派・メノー派・抗議派といった“オールド・ディセント”が自由主義運動の担い手となった。しかし，19世紀後半にはエスタブリッシュメントと融合して戦闘性を失った。スウェーデンでも，自由教会は政治的立場を取ることがあったが，主として農村や中小都市を基盤としていたため，労働運動にインパクトを与えることはなかった。McLeod, 1999, *op.cit.*, p.125.

(45) モーリス・カウリングによれば，英国社会主義者のキリスト教に対する態度は4つに大別されるという。一つは，キリスト教は社会主義を含むという考え方で，ゴア，トニー，テンブル，クリップス，トニー・ベン，ランズベリー，ヘンダーソン，アトリー，ジョン・スミス，ブレアーなどがこれにあたる。第2は逆に，社会主義は新たな宗教としてキリスト教に取って代わるべきだとする考え方で，ショー，H・G・ウェルズ，ラッセルなどが含まれる。第3は，社会主義はキリスト教以後の世俗的原理の上に打ち立てられるべきだとする考え方で，ドールトン，クロスランドなどである。第4は，キリスト教を非社会主義的な思想・文化に限定すべきだとする考え方で，モリス，マクドナルド，ベアトリス・ウェップ，ラスキ，クロスマン，オーウェル，レイモンド・ウィリアムスが含まれる。Cowling, *op.cit.*, pp.503-4. こうした区分が，左派・右派といった政治的区分に全く対応していないというのも，英国社会主義の特徴を考える上で興味深い。

他方、キリスト教の側も、大戦への態度は宗派によって大きく割れた。国教会が賛成したほか、カトリック教会も熱烈に支持した。だが、非国教派には反対に回った平和主義者も多かった⁽⁴⁶⁾。兵役を免除される代わりに本国での奉仕作業を割り当てられる良心的反対者 (conscientious objector) の申請者約16,500人のうちの95%は非国教徒、そしてその大多数はクエーカーであったとされる⁽⁴⁷⁾。しかし、非国教徒の平和主義の最大の弱点は、それが絶対的な原理の上に打ち立てられておらず、場当たりのものになりがちなことであった。伝統的に非国教徒は確かにおしなべて道徳主義的で、社会正義への情熱的要求に満ち溢れていた。非国教徒の心は常に、絶対的な善と悪というタームでものを考えるように仕向けられていたのだが、複雑な国際社会においては、より妥協的な道を通して実現するような原理が求められることになる。そういう原理が欠けている時、非国教徒は、2つの悪のうちでどちらがよりましたか、あるいは究極的な理想よりも現在有益ないし達成可能なものは何か、を追求するためのプランを立てるといった繊細な仕事にはあまり向いていなかった。要するに、平和という抽象的な目標は、どんなに情熱的に打ち立てられたとしても、戦争に伴う大衆への高揚した情緒的アピールに対して確実な防衛とはならなかった。つまり、いったん国家の一大事が生じ来れば、具体的な指導原理を持っていない非国教徒の世界観は何ら明快な反応をすることができなかつたのである⁽⁴⁸⁾。いずれにせよ第一次大戦は、非国教派の弱体化に大きな役割を果たしたのであった。

同じことは、幹部に非国教徒が多かった独立労働党にも当てはまるであろう。ハーディやマクドナルド、グレジャーなどには宗教的人類愛に基づく抽象的な平和原理しかなく、そのため戦争反対にしる賛成にしる確固たる見解を提出することができなかつた。それに対して、個々の成員はともかく組織としては宗教色が皆無に等しいフェビアン協会は、絶対的・抽象的な命法を持たない分だけ戦争の現実に対して応変に対応することができた。有効策なく原理に固執して労働者大衆の離反を招いた独立労働党は、大戦後期には大衆の厭戦気分から一時勢力を取り戻すかに見えたが、戦後はもはや労働党内においてマージナルな、そして左翼的な「同人会」の地位をしか占めなくなつた⁽⁴⁹⁾。その原因としては、労働党の地方組織(地方労働党)が充実してきて独立労働党の地方基盤が侵食されていったことも挙げられるのだが、やはりその支配の「正当性」が失われてしまったことが大きい。独立労働党の党内影響力の衰退によって、社会主義的平和主義者は自信を喪失し、19世紀から培われてきた労働運動・社会主義の宗教的な精神性は失われた。それは、労働党結成前後から着実に進行していた社会主義の世俗化の、掉尾を飾る事件であつたと言ってよい。

(46) ブロック・ミルマンの最近の詳細な第一次大戦史研究によれば、反戦派は民主的統制連合 (Union of Democratic Control) を中核機関として、キリスト教反戦家、リベラルな反戦家、社会主義反戦家、シルヴィア・バンカーストラ女性参政運動家、ノーマン・エンジェルとバートランド・ラッセルに代表される世俗の人道主義者たちが結集したものであつた。Millman, *op. cit.*, p.92. なかでも「最も傑出した反戦家 (dissenters) は宗教的人々であつた。」*Ibid.*, p.18.

(47) この時期のクエーカーたちの平和主義・平和運動については、Thomas C. Kennedy, *British Quakerism 1860-1920: The Transformation of a Religious Community*, Oxford University Press, 2001に詳しい。

(48) Timothy Larsen, *Friends of Religious Equity: Nonconformist Politics in Mid-Victorian England*, Boydell, 1999, pp.217-8, p.265.

社会主義の世俗化と第一次世界大戦（尾上正人）

1918年1月、ロンドンのメソヂスト中央ホールにおいて臨時党大会が開かれ、シドニー・ウェブが起草した産業の公的所有条項（クローズ）を含む新規約が採択された。いわゆる「クローズ 社会主義」の始まりである。この規約改正はかつて拙稿でも触れたように、当時は現在ほど重要な意義を持つものとして受け止められていなかったのだが、しかし、ともあれ党史上初めて、明確に社会主義の意味内容を発する文言が盛り込まれたのである。もとより公的所有条項は、独立労働党が早くから自らの綱領に謳っていたものではある。だが、労働党がそれを正式に採用したことは、独立労働党のような社会主義者組織におけるその保持よりも大きな意味を持った。何となれば、労働組合勢力と社会主義団体との、統一的世界観・信条を持たないある種の“野合”組織であった英国労働党が、社会主義団体（ここではフェビアン協会）の側のヘゲモニーの下で初めて、社会主義的世界観を表明することになったからである。

社会主義者団体である独立労働党の支配の「正当性」が衰微して「小さな同人会」へと転落することによって、むしろ労働党が社会主義政党に生まれ変わったというのは、一見すると逆説的ではある。しかしながら、そこには次のようなからくりが働いていた。以前の労働党内において独立労働党が代表していたのは、国有化のような明確な社会主義思想よりもむしろ、非国教派キリスト教に裏打ちされた倫理的・道徳的心情であった。この心情は、英国社会の世俗化が進行著しいとは言えなお、労働党全体に浸透していたものであった。第一次大戦初期の労組勢力を中心とするナショナリズム感情の高まりは、この心情の支配力を弱めるとともに、党の支柱となる世界認識のそれは単なる心情であっても、より体系的な世界観であってもよいのだが 空位状態をもたらした。そこに割り込んできたのがシドニー・ウェブであり⁽⁵⁰⁾、「クローズ」だったのである。第一次大戦は、そのような変化の一種“触媒”の役割を果たしたと言えよう⁽⁵¹⁾。

(49) その後の独立労働党は、マクドナルドのような草創期の大物政治家も離脱して、思想的急進性を強め、党内の中心的な反主流左派勢力となった。1930年（第2次マクドナルド政権期）の独立労働党大会では、自党の政策に反する場合には独立労働党選出の下院議員は政府に反対票を投ずることが可決された。32年には労働党そのものを離脱した。ただし個々のメンバーには、労働党に残るかどうか（独立労働党を抜けるかどうか）の選択権が与えられた。反ファシズムの統一戦線で共産党と協同歩調を取るにしたがって、25年には5万人いた党員数が33年には11,000人、35年には4,000人にまで激減した。第二次大戦後、指導者ジェームズ・マクストンの死去に伴い、わずか2名の独立労働党下院議員は労働党に再結集した。

(50) このことは当然ながら、シドニー・ウェブ本人がキリスト教から縁遠い人間であったとか、無神論者であったとかいうことを意味するものではない。シドニーは個人的にはむしろ、情熱的ではないけれども学究的な宗教家であり、特に監督教会とカルヴィニズムの教義に通じていて「どんな宗教も無宗教よりましである」という言葉も残している。Peter Beilharz, 'Fabianism,' in Peter Beilharz and Chris Nyland (eds.), *The Webbs, Fabianism and Feminism: Fabianism and the Political Economy of Everyday Life*, Ashgate, 1998, pp.15-6. また、ベアトリスの国教会信仰は夫よりも熱心だったようである。Cowling, *op.cit.*, pp.514-8.

(51) ウェブ夫妻自身はこのプロセスについて、「戦争とそれが必然的にとらなければならなかったはげしい論争をともなった決定の緊張のなかで、労働党はその綱領〔党規約〕を改正し、その目的をひろげ、……」という、非常に興味深い表現法を残している。Sydney and Beatrice Webb, *The History of Trade Unionism*, Longmans, 1926. 荒畑寒村（監訳）、飯田 鼎・高橋 洸（訳）『労働組合運動の歴史』⑤、日本労働協会、1973年、813頁。

おわりに

18世紀中葉から始まった宗教の復興現象は、特にニュー・ディセントと呼ばれた非国教諸派に有利に作用し、自由主義ミドル・クラス（ブルジョアジー）のほか、国教会の影響力の比較的小さい地域における数多くの労働者大衆の心を掴んだ。ここから19世紀後半に至るまでの英国政治は、階級対立よりも宗教対立を基調としたものであったと見ることもできる。選挙法改正と反穀物法同盟を頂点とする自由主義改革運動もさることながら、経済的繁栄期に花開いた自由労働主義の労使協調路線は、労使の宗教的親近感を背景にしたものでもあった。さらに、19世紀末に発足した独立労働党も非国教派改革運動の流れを汲んでおり、彼らが1906年に創設された労働党の思想的中核の一つを占めたことから、労働党も宗教的色彩の強い政党としてスタートした面があった。

だが他方で19世紀末は、礼拝出席行動の低落に表されるような宗教的世界観の衰微＝社会の世俗化が進行した時期にも当たっており、労働党が非国教派色に染められることには労組勢力からの抵抗・反発もあった。また、ローマ・カトリックは、こうした世俗化現象に背馳するかのようスラムなどの貧困労働者層を中心に信者を激増させて、無視し得ない勢力となっていた。こうしたことから、労働党は非国教派色を残しつつも時とともに宗教的多元主義の立場に移行していった。1914年に勃発した第一次大戦は少なくともその初期局面において、広範な労働者大衆にナショナリズム感情を激発させ、宗教的見地から微温的反戦主義を唱えた独立労働党幹部の労働党内での地位を危うくすることによって、上記のプロセスに拍車をかけたと言える。この時点で、労働党の思想信条的中核は（個々の黨員レヴェルを除けば）宗教的なものから脱却し、その空位状況に割って入ってきたのが、社会主義の世俗的ヴァージョンと言うべき「クローズ」だったのである。

このように「社会主義の世俗化と第一次世界大戦」と題する本稿では、産業国有化思想と第一次大戦との関係を、いささか回りくどい視点で　つまり、大衆のナショナリズムが宗教の影響力衰退の“触媒”になったという形で　眺め直してきた。だがもちろん、国有化と大戦の間にはもっと直接的な関係もある。すなわち、総力戦体制の下での国家による産業統制が国有化（思想）の土壌を作った、といった関係である。大戦中に党首を務め、ロイド・ジョージ挙国一致内閣の無任所大臣（Minister without Portfolio）でもあったアーサー・ヘンダーソンは、すでに1917年の著書でこう述べていた　「嘗ては資本家及び労働者の権利及自由の堪ふ可らざる侵害と考へられた『国有制度』は、前世紀の個人主義的傳統中に教育された人々からでさへ、有効な抗議無しに承入れられた。……[大戦中の]多事な四ヶ年の間に、われわれは一世紀間の経済的進化の果實を集めたのである」⁽⁵²⁾。しかしながら本稿では、このような従来よく議論されてきた関係とは別個に、労働党内の旧来の「正当性」を揺るがすことに対しても　それなくして、新しい世界観（「クローズ」）が入り込む余地は大きくなかったはずであろう　、大戦は非常に寄与したと考えているのである。

（おのうえ・まさと 奈良大学社会学部助教授）

⁽⁵²⁾ Arthur Henderson, *The Aims of Labour*, 1917. 佐藤 清（訳）『英国労働党の本領』、實文館、1919年、1-2頁。